View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

神戸女学院大学論集　第55巻第2号　Kobe College Studies Vol. 55 No. 2 (2008)

アルキビアデスのソクラテス賛美演説に関する一つのノート

高　橋　雅　人

A Note on Alcibiades' Eulogy to Socrates

TAKAHASHI Masahito

Abstract

Plato's *Symposium* is one of the most puzzling dialogues among his works to interpret. It has many diverse parts such as the followings: the introduction, which shows that this dialogue is a report of the reported dialogue; different people's eulogies to *Erōs* in different styles; Socrates' report of Diotima's Speech on *Erōs,* in which the form of beauty is told; and Alcibiades' eulogy to Socrates. Not only each of them but also the unity of the whole dialogue is difficult to grasp.

In the section 1 of this paper, I suggest that *Symposium* is "the second apology of Socrates", as it were, because the dialogue explains why Socrates is always with young handsome guys, and yet he is not responsible for their corruption. As an *Erōs,* he pursuits beautiful youth and wisdom (because it is also beautiful) and is on the "ladder" to the form of beauty. In the section 2, by examining how ordinary people in ancient Greece think about 'the boy-loving' or homosexuality, I point out that loved boys (*erōmenoi*) who are expected to play a "passive" role but in reality take an "active" one between their homosexual relationship may not take any political office or action. In the last section, by analyzing Alcibiades' eulogy to Socrates, I clarify two points. First, although Alcibiades may not take any political activity because of his seduction of Socrates, he will take a decisive role in the fall of the imperial Athens. This is why the corruption of Alcibiades is due, not to Socrates, but to himself. Second, it is Alcibiades' knowledge and ignorance about Socrates that leads him to call his master "*hybristēs*". He knows that Socrates is superior to himself in wisdom; but he never knows that this wisdom is the awareness of ignorance.

キーワード：プラトン『饗宴』、エロース、ソクラテス、アルキビアデス
Key words: Plato's *Symposium*, *Erōs*, Socrates, Alcibiades

本学文学部総合文化学科准教授
連絡先：高橋雅人　〒662-8505　西宮市岡田山4-1　神戸女学院大学文学部総合文化学科
m-takah@mail.kobe-c.ac.jp

『饗宴』はプラトンの対話篇のなかでも、解釈の困難な対話篇の一つである。対話篇冒頭に語られる二重の間接的報告の意味、次々と語られるエロース賛美演説相互の連関、ディオティマから学んだそのままを語るというソクラテスのエロース論の意義など、様々な要素的部分を解きほぐすのは、それ自体として難しい。そしてそればかりでなく、それら諸部分の関連を緊密なつながりのなかで統一的に解釈することも、骨が折れる[1]。

本論文は、このように理解の困難な『饗宴』の一つの部分、すなわち、エロース賛美演説の代替としてのアルキビアデスによるソクラテス賛美演説を理解しようとする試みである。そのために、まず第一節において『饗宴』は全体として、『ソクラテスの弁明』（以下、『弁明』）で十分には語りつくせなかった青少年とソクラテスとのエロース的関わりを、ある意味で「弁明する」書であることを指摘する[2]。そして第二節において少年愛について当時の人々の一般的見解を検討する。その上で、第三節においてアルキビアデス演説で明らかにされるソクラテスの真実について、一つの理解を示してみたい。

一

すでに述べたように、『饗宴』をどのように読むかは難しい問題である。本節で私は『饗宴』をソクラテスの第二の弁明として読み解くことが可能なのではないかという立場を提唱したい。周知のように、プラトンの対話篇の主人公はソクラテスが多いが、それは何らかの意味でソクラテスの真実を明らかにするためだと考えられる。例えば、『国家』はソクラテスの正しさの真実を、『テアイテトス』はソクラテスの問答の真実を、それぞれ明らかにしていると言われるだろう。『饗宴』もまた何らかの仕方でソクラテスの真実を明らかにしていると考えられる。しかし『饗宴』はさらに「ソクラテスの第二の弁明」として読み解くことができるのではないだろうか。

まずは『饗宴』と『弁明』との類似点を指摘しておこう。『弁明』の冒頭では、ソクラテスの告発者たちは説得的に語ったが、真実は何一つ語らなかったのに対して、ソクラテス本人は思いつくままの言葉で気ままに語るだろうが、しかし真実のすべてを語るとして、告発者たちとソクラテスとの鋭い対照が示されている（17a–c）。それと同じように、『饗宴』でもソクラテスはエロース賛美演説を始めるにあたって、「用語や言い回しはいきあたりばったり（199b 4–5）」のものだが、真実であることを強調する。また、『弁明』でソクラテスの前に語る告発者たちが説得的に語ったように、『饗宴』でソクラテスの前に語ったアガトンはゴルギアス流の見事な弁論を披露する（198c）。それにもかかわらず、告発者の一人であるメレトスがソクラテスのエレンコスに手もなくひねられるのと同じく、アガトンもまた自らが語ったエロース賛美の誤りを認めざるを得ないところに追い込まれる（201c）。

とはいえこういった外面的な類似点のみによって、『饗宴』が「ソクラテスの第二の弁明」として解釈できるというのではない。より重要な点は、ソクラテスの告発の理由の内の一つに対して他ならぬ『饗宴』で弁明しているということである。だからこそ『饗宴』は「第二弁明」

なのである。

ソクラテスが不正を犯しているという告発者たちが挙げる根拠は二つあった。つまり、（1）国家の認める神々を認めない、（2）若者を堕落させる、の二つである。このうち、（1）に対しては、『弁明』において真正の神をほのめかしつつ、ソクラテスは自らの哲学的問答という活動が神への奉仕であることを説明し、十分に弁明したと言ってよいだろう。しかし、（2）に対しては『弁明』においては十分には語られていないのではないだろうか。もちろん、ソクラテスの活動が若者を堕落させるものではないことは、第一に、メレトスとの問答でその可能性が否定され（なぜなら国家の中でソクラテスというたった一人の人間のみが若者を堕落させるようなことはあり得ないから）、また、さらにはその現実性が否定されている（なぜならソクラテスを告発するどころか擁護するために集まっている若者がいるから）。だがこういったことで若者を堕落させるという告発に対して十分答えていることになるだろうか。

次の二つの理由で不十分であると思われる。

第一に、アテナイの危機を招いた者たちについては何も語られていないからである。『カルミデス』において語られているように、ソクラテスが青少年の美しさに「敏感であった」のは事実のようだ[3]が、そのカルミデスや後見人のクリティアスのアテナイという国家への反逆は、忌わしい思い出であり、それはまさにソクラテスが原因と思われていたのである。アルキビアデスとの関係は言うまでもないだろう。とすると、ペロポネソス戦争後の国家的危機の時代を生き延びた若者たちにどれほど言及しようとも、その危機をもたらした張本人たちは死んでしまっていてソクラテス裁判の場に現れることはできない以上、もし彼らがいたならば、メレトスに同調したという可能性はないのかという疑問に答えることができないだろう。ソクラテスはある若者たちは堕落させなかったかもしれない。そのことはソクラテスを擁護する若者たちがいることから認めてもよい。しかし、肝心のクリティアスやアルキビアデスらとの関係はどのようなものだったのか――裁判の場にいたアテナイの民衆たちの多くはこう思っていたのではないだろうか。『弁明』におけるソクラテスの弁明はこれによく答えているとは言えないだろう。

第二に、これはより『弁明』という書に内在的な事柄であるが、『弁明』は若者の教育問題を宗教問題に帰着させているからである。ソクラテスはメレトスにソクラテスがどのようにして若者を堕落させているのかと問い、「国家が崇める神々は崇めないように教え、他方で新奇な神を崇めるように教えることによって堕落させている（26b）」という答えを引き出している。そこからソクラテスは、ダイモニオンという神々に関わりのあるものを信じておきながら、神々を信じないことはあり得ないということを引き出して、メレトスの論駁を終える。このようにソクラテスは教育問題を宗教問題に帰着させ、「誰よりも神を信じている（35d）」ことを明かし、それによって弁明を閉じる。しかし、このような弁明の仕方は、逆に言えば、若者を堕落させているか否かという教育問題そのものをそれ自体として扱わなかったことを意味するだろう[4]。

以上の二つの理由によって、アテナイを危機に陥れた若者とソクラテスとの交わりなるものの胡散臭さは『弁明』だけで晴らされるものではないと言わざるを得ない。ソクラテスの弁明

を完成するには、どうしても他の弁明が必要である。その役割を果たすのがソクラテスをエロースとして描く『饗宴』である。

ソクラテスの哲学的営みを思い起こそう。ソクラテスは人々をアポリアに追い込み、無知を自覚せよと説く。しかしアポリアを自覚し、探究を続けても、いったい何が得られるというのだろうか。何も、あるいはほとんど何も得られないという思いを拭い去ることは難しい。やっとのことで得たと思えたことさえソクラテス自らの手で葬り去られるからである。『メノン』では、ソクラテスの問いによって徳とは何であるか答えることができなくなったメノンが、ソクラテスをしびれエイに喩え、探究のアポリアを提出し、何とか探究することそのものから逃れようとする。それに対してソクラテスはミュートスを語り、想起説を述べた後、仮設法まで繰り出して、メノンとの探究を続行する。ところがそれほどまでの苦労の結果得られた「徳は教えられうる」という結論をソクラテスは直ちに捨て去り、今度は逆に「徳は教えられえない」ことを明らかにしようとする。

探究の結果、何かが得られるのであれば、探究の意義はわかりやすい。だが何も得られないのである。にもかかわらず探究を止めないソクラテスのしつこさに辟易とした者は数多いたのではないだろうか。

なぜソクラテスはそこまで執拗なのか。この問いに答えるのが、ソクラテスはエロースだからという説明ではないだろうか。エロースはペニアの性を受け継ぎ、無知を自覚している。他方、ポロスの性を受け継ぎ、術策に富んでいるため、最も美しいものの一つである知恵を求める探究の道筋をいつも生み出す。そして何らかのものを手に入れる。ところがしばらくすると、ペニアの性のゆえ手に入れたものは指の間からこぼれ落ちるのである。このようなエロースの姿はソクラテスのそれに重なる。つまり、ソクラテスは無知を自覚し、知を求めつつ、知者とはなり得ない中間者——エロースとしての哲学者——なのである。

哲学者ソクラテスはエロースである。まさにここから、ソクラテスが知を求め、美しい青少年と対話を繰り返したことが理解される。なぜなら、エロースは美しいものを求めるからである。そしてその次第は、反省的な仕方で、いわゆる美のイデアを頂点とする階梯を登っていく「奥義」部分で語られている。それによれば、人はまず一人の美しい肉体に恋して、言論を生み出さなければならない。次に多くの肉体を恋して、肉体の美しさが同じであることを見いだし、言論を生み出さなければならない。続けて美しい魂に恋して言論を生み出す必要があり、さらにさまざまな営みや法律、知識の美しさに目を開かれ、多くの美しい言論を生み出さなければならない。人はこうして「正しく少年愛することを通じて（211b5-6）」美の階梯を上昇し、最後には美のイデアを見るに至り、その時、真正の徳を生むことになるのである。

ソクラテスは、このようなディオティマの話に「すっかり納得（212b1）」したので、「エロースに関わる諸々のことを尊重して、きわめて熱心に修練し、かつまた他の人々に勧めている（212b6-7）」と述べている。この言葉はソクラテスがなぜ始終、若者と議論をしていたのかを説明している。ソクラテスの哲学という営みは、美のイデアを目指した美の階梯の上昇であり、真正の徳を生み出すことを目指してのものであり、それは若者を必要とする「正しい少年愛」だったのである[5]。

だが、このように語られる「正しい少年愛」は、もちろん、ソクラテスがディオティマによって授けられたものであり、一般の通念とは著しく異なっていた。では、少年愛は当時のギリシア人にとって、いったいどのようなものであったのだろうか。また、このような「少年愛」を実践しているソクラテスに、実際に出会ってしまったアルキビアデスはいったいどのようなことを述べるのであろうか。次節で前者について簡潔に見たあと、三節においてアルキビアデスの演説における二つのポイントを検討してみたい。

二

エラステース（恋する者）とエローメノス（恋される者）との関係がどのようなものであったかを知るために、まずはアリストテレスを引いてみよう。

> 恋し恋される人たちは、同じことに快楽を感じるのではなくて、恋する人は相手を見ることによろこびを覚え、恋される人は自分を恋してくれる人から世話されることによろこびを覚える（からである）。また、この場合、恋される人の花盛りの季節が過ぎると、友愛もまた、時には止むことになる。なぜなら、恋する人が自分の相手を見てももはや快くはないし、恋される人もそれまでのように相手から世話をやかれることもないからである[6]。

アリストテレスによれば、一方でエラステースは快楽を求めるのに対して、他方でエローメノスはエラステースの持っている「善きもの」を求めている。互いが互いに求めるものの違いのゆえに、二人の関係は長続きしない[7]。エローメノスの求めている「善きもの」は、金銭や政治的権力、徳などである[8]。では、対するエラステースは、性的欲求を満たし、快楽を得ることのみを望んでいたのであろうか。この点については、クセノポンの『ヒエローン』を参照すべきであろう。

> 私（ヒエローン）はダイロコスから、おそらくは人間の自然本性が美しい者たちから得ることを強いるものを、欲しているのだ。だが私は得たいと欲しているものを、友愛と好意を持つ者から、得たいと非常に強く欲求しているのだ[9]。

つまり、たとえ性的欲求の満足を求めるにしても、その欲求が金銭によって、いわんや暴力によって満たされることを求めているのではない。あくまでも相手との友愛があり、かつ相手の好意があって、それを通して、あるいはそれに基づいての性的満足を得ることが求められているのである[10]。

ではそもそも少年愛に対する道徳的評価はどのようなものであったのだろうか。少年愛は不自然である、ないし自然に反するといったものもあるが[11]、しかし上に引いたヒエローンの言葉の内に「人間の自然本性」という語があるように、むしろ自然なものと考えられていた。あるいはまた、アイスキネスは『ティマルコス告発』136節で、「私自身、恋する者[12]であったし、今なおそうであることも否定しない。また、そうした振る舞いに起因する張り合いや喧嘩沙汰

が私にはなかったと否定することもしない」と述べている。

しかしもちろん、少年愛それ自体が自然なものであるとしても、アイスキネスがティマルコスを告発しているように、「してはならない仕方」があった。クセノポンの『饗宴』8章21節では、「少年は性の営みの際、女のように男と快楽を共にすることもなく、性に酔いしれた相手を覚めた眼で眺めている」と言われている。このクセノポンの言葉は「記述的」つまり、価値評価を含まないものとして書かれているが、あらゆるエローメノスが、事実こうであったというのではなくて、この記述から逸脱するケースは当然あっただろう。そのようなケースとしてアイスキネスはティマルコスを非難しているのであり、それが非難として正当なものであるという訴えが成り立っていることは、逸脱は許されないという規範があったことを確実に物語るであろう。

ではそのような逸脱としてどのようなものが考えられていたのだろうか。ドーヴァーによれば、悪しきエローメノスの態度として、報酬を受け取る、平気であるいは自ら欲して男色における屈辱的役割に甘んじる、屈んだ姿勢または低い姿勢を執る、といったものがあげられていたという[13]。そしてこのような態度をとったものは、男性市民という身分から離脱し、外国人や女性と同等の地位に自己を置いたと見なされた。そしてこれは男娼と同じく、売春したともみなされるとドーヴァーは指摘する[14]。ここには男性が「能動」、女性が「受動」という関係性が、少年愛のエラステースとエローメノスの二人に投影されていると言えよう[15]。とはいえ、事は必ずしもそれほど単純ではない。いずれ男になるべきものとしての少年は、受動的役割を平気で、あるいは自ら欲して引き受けることは拒否すべきだとされているからである。しかしこのことは逆に言えば、自ら欲しもせず、またいやいやながらであっても、その役割を満たすことが期待されていることでもあろう。いや、むしろ徳のためであれば、自発的な隷属はむしろ賞賛されるのである[16]。

少年愛に関する規範的意識は以上のようなものであるが、この節を閉じるにあたってもう一つ、ここで注目しておきたいのはヒュブリス（ὕβρις）である。この語は高慢や傲慢を意味するが、ドーヴァーによるとアテナイにはヒュブリス罪というものがあった。これは暴行という犯罪であるが、単なる暴行ではなくて、被害者に対して支配的な位置を確立しようとして、あるいは自分の力を恃みとして、他人を家畜同然に扱うという慢心から行われたものが、ヒュブリス罪とされたという。また、性欲が強く、それを満たすのに、あつかましく、しつこく、強引な男はヒュブリステース（ὑβρίστης）と呼ばれたという[17]。

さてなぜここでヒュブリスに言及したのかといえば、それはアルキビアデスがソクラテスを「ヒュブリステース」と呼ぶ[18]からに他ならない。ではいったいこれはどのような意味を持ったのか。次節で考えてみることにしたい。

三

ソクラテスによるエロースの「真実」が語られた後、その「真実」に疑義を呈すべくアリストパネスが口を挟もうとする。ところが、そこに騒々しい一団があらわれる。アルキビアデスの一行である。それまでの宴会でエロースを賛美する演説をしていたことを聞かされたアルキ

ビアデスは、皆の賛同を得た上で、エロースではなくてソクラテスを「真実」にもとづいて賛美する[19]ことになる。その賛美は、簡単に言えば、ソクラテスの外見と内面の対照をシレノスに喩えた上で、節制、強靭な肉体、勇気、内に知性を湛えた言葉などの点で、ソクラテスが他の人をはるかに凌駕していることを称えるものである。

それでは、このようなアルキビアデスによるソクラテス賛美演説は、どのように解釈されるべきなのであろうか。

ドーヴァーは、ディオティマの語った「正しい少年愛」をソクラテスが実践したことを示すのがプラトンの主要な目的であると解釈する[20]。これはソクラテスの演説とアルキビアデスの演説とが、相互補完的だという解釈である[21]。これに対してヌスバウムは、ソクラテスとアルキビアデスはそれぞれ異なった価値を称揚しており、我々はどちらかを選ばなければいけないと述べる[22]。これは二人の演説が互いに背反するという解釈である。

こういった二つの解釈を前にして、我々はどちらを選ぶべきなのだろうか。ソクラテスとアルキビアデスの演説は互いに相補っているのか、それとも一方が他方を否定しているのか。別言すれば、アルキビアデスの語るソクラテスの真実はどの程度まで真実なのか。我々は一節において、『饗宴』が、とりわけソクラテスの語るエロース賛美演説が、エロースとしてのソクラテスを明らかにしていると解釈した。この解釈に整合的なアルキビアデス演説の解釈は、ドーヴァーの解釈とヌスバウムの解釈とどちらなのであろうか。

我々は、どちらも不十分だと考える。ドーヴァーは、アルキビアデス演説において語られているソクラテスの姿が真実であることは正しく把握しているが、それを語るのがアルキビアデスであることを考慮していない。ヌスバウムは、賛美演説をしたのがソクラテスから離れ去ったアルキビアデスであることを正しく把握しているが、語られたことが真実であることを軽く見すぎている。それゆえ我々は、どちらか一方を採用し、他方を捨てるのではなくて、むしろその両者の解釈を総合する方向を探らなければならない。つまり、アルキビアデスが語る事柄のうち、起こった出来事は、確かにソクラテスが反対しなかった限りにおいて真実であるが、しかしその意義はあくまでアルキビアデスに映じた限りでのものである、という解釈の方向である。この方向の正しさは、（1）アルキビアデスの語る事柄が事実ではないとはソクラテスがいっさい反対しないこと、（2）しかし大まじめに真剣に語ったアルキビアデスの演説が終わった後に、その演説を「サテュロス的、シレノス的劇」と評し、その二重性を暴いていること[23]、の二つの点によって確証されるだろう。

以上のように、アルキビアデス演説を解釈する方向を定めた我々は、その演説の中から次の二つの点を取り上げて、ソクラテスの真実を明らかにしたい。その二点とは、アルキビアデスがソクラテスを誘惑したという話と、アルキビアデスがソクラテスを「傲慢な人」と呼ぶという事実である。

まず、アルキビアデスの誘惑について述べよう。ソクラテス賛美演説の中で、われわれにショッキングなのは、アルキビアデスによるソクラテスの誘惑であろう。アルキビアデスはそのことを、とりわけソクラテスとの一夜を述べるのに、「真実」であることを再び主張する[24]。ではこのようなエピソードをアルキビアデスに語らせることで、いったいプラトンは何を言お

うとしているのであろうか。

アルキビアデスの誘惑は、実は、成人男子が青少年を誘惑する紋切り型の策略をソクラテスに対して用いていることが指摘できる[25]。そもそもこれはアルキビアデス本人が自覚していることなのである[26]。だが前節に基づけば、これは受動の役割を果たすべきエローメノスの態度としては許されないことであろう。しかもアルキビアデスは、ソクラテスとの一夜は『饗宴』の場に居る者たちだけに語られるべきであると述べ、語るのに酒の力を必要とするが、語らなければ賞賛は完成しないとして、その体験を語り出すのである[27]。しかしそうまでしてこういった告白をアルキビアデスに語らせるプラトンの意図は、いったい何であろうか。

我々はプラトンが二つの意図を持っていたと考える。プラトンは当時の道徳的通念に従って、アルキビアデスを批判している、と同時に、当時の道徳的通念そのものを批判している。

まず、第一の点は次のように展開できる。当時の道徳的通念では、エローメノスでありながら、エローメノスの果たすべき役割を逸脱した者は、政治的権利を失うとされていた。それゆえ、エローメノスでありながら、その役割を逸脱してエラステースのソクラテスを誘惑したアルキビアデスは、政治に関わる資格はそもそもなかった[28]。そもそもソクラテスはアルキビアデスに対して政治に関わらないように忠告していた[29]。したがって、アルキビアデスが後にアテナイを破滅に導いたことの責任は、ソクラテスにはない。このことを示そうとするのが、プラトンの意図ではないだろうか。アルキビアデスはそもそも政治に携わる資格はなかった。それは彼のソクラテスに対する態度、エローメノスがとるべき態度を逸脱したことから明らかである。ソクラテスがアルキビアデスに政治に関わるのを制止していたのは、アルキビアデスには政治に携わる資格がないことをソクラテスがよく知っていたからに他ならない。したがって、アルキビアデスのその後の行動に対して、ソクラテスは一切、責任がない。これがプラトンの言おうとしていることだと考えられる。

二つ目の点は次のように敷衍できる。エローメノスに「厳しい」当時の道徳的通念は、エラステースに対しては「厳しく」ない。つまり、エローメノスを通じて性的満足を得ることは自然のことと思われていた。しかし他方で、少年愛を賛美する人々はエラステースが望むのは、エローメノスの道徳的・知的成長であると言われていた[30]。この不均衡[31]に対して、ソクラテスはエローメノスの道徳的・知的成長のみを欲していたことを、アルキビアデスの誘惑の失敗の挿話は示している。なぜならソクラテスはアルキビアデスによって性的快楽を得ようとしたことはなく、ただアルキビアデスの道徳的成長を望んでいたからである。それはアルキビアデスが証言するとおりである。これがプラトンのもう一つの意図だと考えられるのである。

だがそれでも、と人は言うかもしれない、あれほどの資質を持ったアルキビアデスはやはり、ソクラテスとの交際を通じて何か悪影響を受けたのではないか、と。そのことをアルキビアデスは自覚しているからこそ、ソクラテスを傲慢な人（ヒュブリステース）だと呼ぶのではないだろうか[32]、と。

この疑問に対しては、アルキビアデスのソクラテスに対する無理解を露呈しているのだ、とあくまでアルキビアデスに辛い解釈をとることもできるかもしれない[33]。しかし本当にそうであろうか。アルキビアデスがソクラテスのことを完全に理解していないとするならば、なぜ彼

は「真実に基づく賛美」をすることができたのか。アルキビアデスはソクラテスに恋され恋する者として、ソクラテスに関する何らかの真実を把握していたのではないだろうか。

まず、ソクラテスは、美しき者への欲求が強く、しつこく、是が非でも「手に入れる」人間として描かれている[34]から、ある一面で「傲慢な人」であることは認められるだろう。またアルキビアデスとソクラテスとの間にある、知的なレヴェルの差、あるいは魂の善さに関する差は歴然としていたことを考えると、そのような圧倒的な「力の差」のゆえにアルキビアデスがソクラテスによってほしいままに扱われたと感じたのも無理はないのではないだろうか。そしてアルキビアデス自身が誇っていた身体の美しさに目もくれない（とアルキビアデスには思えた）ソクラテスの態度も、アルキビアデスには傲慢と感じられたのである[35]。

だがそれでもやはり、アルキビアデスの評価は肝心なところで誤っていると言わざるを得ない。それはソクラテスが無知を自覚する者であることを、アルキビアデスは知らなかったのではないか、と思われるからである。もし知らないとするならば、アルキビアデスのソクラテスの把握は誤っていることになる。

この点に関しては、『饗宴』の次のような箇所を参照すべきである。自分を愛する資格のあるのはソクラテスだけだ、なぜならソクラテスのみが自分をより優れた人間にしてくれるからだ、と述べるアルキビアデスに対して、ソクラテスは次のように言う。

> 親愛なるアルキビアデスよ、本当に君はつまらない者ではなさそうだね、いやしくも僕について君が言っていたことが真実であって、君をより善くするような何らかの能力が僕のうちにあるのであれば。…でも幸せな人よ、もっとよく考えたまえ、僕が何者でもないのに、君がそれに気づいていないことがないように（218d7-219a2）。

ソクラテスはアルキビアデスの望みを叶えられないかもしれないと述べる。ソクラテスはアルキビアデスが思っているように、人を優れた者にする能力を持つ者ではないかもしれない。そのようにソクラテスは忠告するのである。

アルキビアデスはソクラテスが「いつもながらのこの人にふさわしい調子で、大いにとぼけて（218d6-7）」語ったと描写する。この描写が、当時の記憶をそのまま再現したものなのか、それとも長じたアルキビアデスによって再解釈されたものなのか、判然としない。しかしどちらにしても、アルキビアデスがソクラテスを理解していなかったことは、ソクラテスの真剣な忠告を「とぼけて」いたとアルキビアデスが見なした点に、如実に明らかにされている。ソクラテスが真剣にアルキビアデスに忠告していたことは、我々には明白である。なぜならソクラテスはエロースであり、知と無知との中間に位置する、無知を自覚する者だからである。だが、エロースこそ知と無知の中間に位置する哲学者であることを詳らかに語るソクラテスのエロース賛美演説を、アルキビアデスは聴いていなかった。だから、彼はソクラテスが解き明かしたエロースの本質を、つまりはソクラテスの本性を知らないのである。アルキビアデスは、ソクラテスが自分にふさわしいエラステースとして見ていた。ソクラテスは自分を優れた者にしてくれる知恵ある者に違いないというのが、アルキビアデスの見立てであった。しかしアルキビ

アデスは、ソクラテスが己の無知を自覚している者であることを知らない。だからこそ、ソクラテスを「ヒュブリステース」と呼ぶことができたのである。自分の「知的レヴェル」に比してソクラテスのそれがはるかに高いこと、その点はおそらくアルキビアデスの評価の通りだろう。しかしそれは、ソクラテスがアルキビアデスの知らないことを知っているからではなかった。アルキビアデスが自覚していない己の無知を、ソクラテスが自覚していたからこそ、ソクラテスはアルキビアデスよりも（そして他のアテナイ人たちよりも）優れていたのである。この大事な点を把握していないアルキビアデスは、ソクラテスを理解するのも中途半端に終わらざるを得ない。

それゆえ、次のように言うべきであろう。アルキビアデスがソクラテスをヒュブリステースと呼ぶことは、アルキビアデスの側に立てば、頷ける発言である。アルキビアデスの見るところ、ソクラテスは知においてアルキビアデスを凌駕していた、だからかれは圧倒的な力を持ち、それを恃みにアルキビアデスをほしいままに操るので、ヒュブリステースなのである。しかしそれはあくまでアルキビアデスに映じたソクラテスである。アルキビアデスが把握できなかったこと、それはソクラテスの無知の自覚である。本当はその点においてこそ、ソクラテスはアルキビアデスよりも高みにあるのだ。しかし無知の自覚を有するものがどうしてヒュブリステース、傲慢な人であろうか。無知の自覚を持たない者こそ傲慢なのではなかったか、まさにアルキビアデスのように。もしアルキビアデスが、己の無知を自覚したとするならば、むしろアルキビアデスはソクラテスと等しい者となり、本当の友愛が二人の間に生じたであろう。アルキビアデスにソクラテスを「ヒュブリステース」と呼ばせているプラトンの意図は以上のようなものであったと考えられるのである。

四

本論文は、『饗宴』がソクラテスの第二の弁明であるという立場から、アルキビアデスの演説を検討してきた。その結果、ソクラテスがアルキビアデスとの交際を通じてアテナイに害をなしたのではなく、むしろアルキビアデスの行ったことはアルキビアデス本人が責任を負うべきことが明らかになったと思われる。それはアルキビアデスが政治に携わる資格がない人間であったこと、そしてアルキビアデスはソクラテスの、まさにソクラテスたるゆえんのものを把握することができなかったこと、のゆえである。

だが問題はまだ残るであろう。すなわち、『饗宴』全体の解釈としては、ソクラテスの第二の弁明というためには、ソクラテスの演説はもちろんのこと、とりわけアガトンの演説を検討する必要があると思われる。というのも、ソクラテスはヒュブリステースだとアガトンも言っているからである。はたしてこのアガトンの発言は、アルキビアデスのそれとどのように関わるのか。席順をめぐる『饗宴』の終わりのエピソードともに、他日、考察してみたいと思う[36]。

注

1　それゆえにこそ、『饗宴』に関する多くの読み方が提唱されてきた。例えば、近年出版された『饗宴』に関する論文集をひもとけば、『饗宴』を新プラトン主義の伝統において読解しようという試み（cf.

Gerson, Lloyd P., "A Platonic Reading of Plato's *Symposium*", in Lesher, James and Nails, Debra and Sheffield, Frisbee C. C., eds., *Plato's Symposium: Issues in Interpretation and Reception,* Harvard University Press, Harvard, 2006, pp. 47–67.）や、アリストテレス流のエンドクサに基づいた考察を『饗宴』に適用しようという試み（cf. "The Earlier Speeches in the *Symposium*: Plato's Endoxic Method?", in Lesher, Nails, and Sheffield, *Plato's Symposium*, 2006, pp. 23–46.）など、さまざまなアイデアが散見される。

2 もちろん、ここには解釈学的循環がある。すなわち、部分を理解しなければ全体は理解できないが、全体を理解しなければ部分が理解できないという循環である。それゆえ、本論は『饗宴』におけるソクラテスの弁明的性格を前提しているという批判は感受せざるを得ない。しかし人はどこからか始めなければならない以上、このような始め方も許されるであろう。

3 『カルミデス』154b。

4 同じ立場の解釈として、加藤信朗『初期プラトン哲学』東京大学出版会、1988, p. 72, が挙げられる。これに対して、渡辺邦夫「アテナイの法廷とソクラテス」『茨城大学人文学部紀要（社会科学論集）』第46集、2008, p.p. 51–52, は、教育問題はそれとして独立していて、「ソクラテスは、教育問題に関し、きわめて戦略的に勝利を目指していた」と解釈する。

5 この「正しい少年愛」は、美のイデアに言わば「まみえる」ことを最終的な目的としており、それゆえ、この考えでは個人は恋の対象ではないという Vlastos の解釈がある。cf. Vlastos, Gregory, "The Individual as an Object of Love in Plato", in Vlastos, Gregory, *Platonic Studies,* 2nd ed., Princeton University Press, 1981, pp. 3–42. これに対して Sheffield は、「イデアの観想は他人を必要としないかもしれないが、我々の本性はその活動が我々の生において現実化し続けることと、神的なイデアから戻って人間の関心領域に伝達することとを、我々に要求する」として、Vlastos に反対の立場を取る。cf. Sheffield, Frisbee C. C., *Plato's Siymposium: The Ethics of Desire,* Oxford, Oxford University Press, 2006, p. 182.

6 アリストテレス『ニコマコス倫理学』第 8 巻第 4 章1157a6–10。訳は朴一功による（アリストテレス（朴一功訳）『ニコマコス倫理学』京都大学学術出版会、2002.）。

7 『ニコマコス倫理学』第 9 巻第 1 章1164a6–8では「こうした事態が起こるのはいつでも、恋する者が、相手の恋される者を、快楽のために愛し、他方、恋される者の方は、自分を恋してくれる者を、有用性のために愛し、しかも、どちらの側にも求められているものがそなわっていない場合」どちらも不満を持つということが語られている（朴一功訳）。ここにも互いの求めるものの非対称が、恋を終結させることになると述べられている。だがこの非対称が恋の本質、ないし恋の特質であるならば、恋は終わらざるを得ないものだとアリストテレスは考えていたことになろう。

8 この点に関しては、『饗宴』のパウサニアスの演説を見よ。その演説でパウサニアスは、エローメノスがエラステースを通じて金銭や政治的権力を獲得しようとするのは恥ずべきものだが、徳を求めるのは立派であると述べる（cf. 184a–c）。

9 Xenophon, *Hiero,* 1: 33.

10 もっともこれはレトリックに過ぎないという批判の余地はあるだろう。だがこの点については立ち入らない。

11 プラトン『法律』841d を参照せよ。『饗宴』や『パイドロス』で少年愛を善きものとして語ったプラトンが、『法律』においてその考えを変えたかどうかは、別に論ずることを要する。

12 原語は ἐρωτικός である。『饗宴』でソクラテスは、この語の中性形を用いて「恋の事柄（τὰ ἐρωτικά）以外には何も知らないと言っている」と自らを規定している（cf. 177d7–8）。

13 K. J. ドーヴァー（中務哲郎・下田立行訳）『古代ギリシアの同性愛　新版』青土社、2007、p. 177。

14 同書、p. 172。

15 この見方に対して Konstan は必ずしもそうではない場合があることを論じている。もっとも、直接ドーヴァーの批判をしているわけではないようだが。Konstan, David, "Enacting *Erōs*", in Martha C. Nussbaum and Juha Sihvola, eds., *The Sleep of Reason: Erotic Experience and Sexual Ethics in Ancient Greece and Rome,* The University of Chicago Press, 2002, pp. 354–373.

16 『饗宴』のパウサニアス演説（184c）を参照のこと。なお、パウサニアスは、エローメノスが自分の

徳性を高めてくれると期待してエラステースの思いを受け入れたが、後になってエラステースがそのような立派な人ではないことが判明したとしても、エローメノスの振る舞いは立派であると言う。徳のためにあらゆる努力を惜しまないのは善きことだからである。しかしこれの真意についてはロウの注釈の該当箇所のを見よ。cf. Rowe, C. J., *Plato: Symposium,* Aris & Phillips, Warminster, 1998.

17 ドーヴァー『古代ギリシアの同性愛　新版』2007、pp. 64–71。

18 『饗宴』215b7。

19 それゆえアルキビアデスの演説は、演説が賛美であるための「真実を語る」というソクラテスが提示する条件を満たしていることになる。cf.『饗宴』198d。

20 Dover, Kenneth, *Plato: Symposium,* Cambridge, 1980, p. 164.

21 Scott や Sheffield もその立場である。cf. Scott, Dominic, "Socrates and Alcibiades in the *Symposium*", *Hermathena* 168, 2000, pp. 25–37; Sheffield, *Plato's Symposium,* 2006, chs. 5–6.

22 ヌスバウムによれば、「永遠のイデアの純粋な光は、開かれ、不安定に揺れ動く肉体の明滅する光を、暗くし、あるいはそれによって暗くされる」のである。イデアの価値を説くのがソクラテスであり、肉体の価値を説くのがアルキビアデスであることは、言うまでもないだろう。cf. Nussbaum, Martha C., "The Speech of Alcibiades: a reading of the Symposium", in Nussbaum, Martha C., *The Fragility of Goodness: Luck and Ethics in Greek Tragedy and Philosophy,* Cambridge University Press, Cambridge, 1st ed., 1986; 2nd. ed., 2001, p. 198.

23 Rowe, *Plato: The Symposium,* 1998, p. 213 は、ソクラテスのアルキビアデス演説へのこのような評は冷やかしであり、ソクラテスにできることは他にはなかったと解釈する。しかしこの解釈は、重要な点を見過ごしている。

24 アルキビアデスはソクラテスを賛美する自分の話が真実であることを、それを語り出す前にも（『饗宴』214e–215a）、またソクラテスへの誘惑の話の前にも（217b）、強調する。

25 cf. Dover, Kenneth, *Plato: Symposium,* Cambridge, 1980, p. 164.

26 アルキビアデス自身、「エラステースがパイディカに対してするように（217c7–8）」と述べている。

27 『饗宴』217e。

28 Dover, Kenneth, *Plato: Symposium,* Cambridge, 1980, p. 164, によれば、アルキビアデスは聴衆を笑わせており、この話には「喜劇的パラドクス」がある。だが、問題はプラトンの意図であり、アルキビアデスの意図ではない。

29 cf.『饗宴』216a。

30 『饗宴』のパウサニアス演説がその典型。

31 Rowe, *Plato: The Symposium,* Warminster, 1998, p. 142, によれば、パウサニアスが卑俗なエロースを非難するのは、性的欲求を満足すること「のみ」を目指しているからである。

32 「ヒュブリス」関連の語の『饗宴』における用例は以下の通りである。アルキビアデスがソクラテスを評して、「あなたは傲慢な人だ（215b7：ὑβρίστης）」と述べ、「傲慢なサテュロス（221e3：ὑβριστοῦ）」と形容する。アガトンもまたソクラテスを「傲慢な人だ（175e7：ὑβρίστης）」と述べる。パウサニアス（181c4）とエリュクシマコス（188a7）が「傲慢な（ὕβρεως）エロース」という語を用いている。二人とも、天上のエロースと卑俗なエロースの二つのエロースの存在を説き、卑俗なエロースを「傲慢」と形容する。

33 Sheffield, *Plato's Symposium: The Ethics of Desire,* Oxford, 2006, p. 193 は、「ヒュブリステース」という性的暴行を意味しうるこの語を用いて非難されるソクラテスが節制のある人物であることは、皮肉なねじれである、とコメントする。

34 222c–223a におけるアガトンを自分の横に座らせるソクラテスの見事な言葉を見よ。

35 ソクラテスはアルキビアデスの「年頃の美しさを軽蔑し、あざ笑って、暴行を加えた（ὕβρισεν）」というのがアルキビアデスの報告である（『饗宴』219c4–5）。

36 本論は、2007年度神戸女学院大学研究所総合研究助成「エロースの型と系譜に関する人文主義的研究」（研究代表者：高橋雅人）による研究成果の一部である。

（原稿受理　2008年10月6日）